

## 中国が爆撃機型 H-6 に空中給油（受油）装置を取付ける

漢和防務評論 20180306(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国が戦略爆撃機として運用している H-6 型爆撃機に空中給油（受油）装置を取付け、試験飛行を行っているようです。

KDR が衛星写真から分析しました。目的は滞空時間を延伸するためで、核戦略の一環として有事対応するためと思われます。

中国に現在それが必要かどうかは疑問ですが、無駄なことでもやってみる価値があると判断したのでしょうか？

KDR 香港特電：

KDR が西安航空機会社の衛星写真を詳細に調べたところ、1機の H-6 を発見した。よく見ると確かに空中給油（受油）装置が付いていた。これはロシアの爆撃機 TU-95SM の方式に似ている。この写真は、太陽光が斜めから射しているため、機首部の上方にある受油管を間違えるはずがない。このような H-6 は 1機だけしか発見できず、しかも格納庫の外側に駐機していたので、明らかに試験飛行段階にあると思われる。現在すでに部隊配備になっている H-6K は、空中給油（受油）管は付いていない。空中給油（受油）管を取付けた H-6 は H-6L 型と称するのだろうか？これは分からない。論理的に判断すると、この機体は、滞空時間を延長するための H-6K の改良型の可能性がある。H-6K は亜音速爆撃機なので、たとえ空中給油（受油）能力を備えたとしても、グアム島まで飛んでいって巡航ミサイル攻撃をすることは不可能である。この種の爆撃機と給油機は極めて容易に発見され、米軍の標的になるだけだ。したがって空中給油（受油）装置を取付ける真の目的は、戦略爆撃機として滞空時間を延長するためであり、核戦争において、飛行場が全て破壊される状況下においても、長期間の空中待機ができる。TU-95SM もまたこのような意図で改修された。

当然、パイロットの訓練は厳しくなり、空中給油（受油）訓練が必要であり、バディを編成して給油することになるだろう。すなわち、H-6U と H-6L がペアになり、H-6U が H-6L に給油する。TU-95 は、クルーを交代制にして、パイロットの休憩室を増やした。小規模生産の H-6K の状況から、今後 H-6 シリーズの戦略爆撃機は継続生産されるものと見られる。改良を加えながら、生産を継続する方式である。改良の余地は大きい。たとえばフルデジタルのアビオニクスであり、FBW 操縦システム、空中給油システム等である。

第 8、10、36 師団は相継いで H-6K を装備している。すでに機番号 20012、11191、20014、20011、11196、20016、11193、11091（6 発の KD-20 型巡航ミサイルを搭載）が発見されている。一部の H-6K は機首下方に E/O 光電探知システムを取付けている。現在主として H-6K に搭載している KD-20 巡航ミサイルには、レーダー探知型、赤外線探知型があり、また YJ-63 型赤外線誘導型空対地ミサ

イルを搭載している機体も発見されている。

これらの写真の中で、H-6Kの多くは弾薬を懸架していない。しかし3個爆撃機師団のH-6Kは、確実にKD-20を受領していると考えられる。上述の公表された写真を見ると、航空兵第10、8師団の所属機の写真が最も多い。何度も台湾東岸に出現したH-6Kは、第10師団の所属機である。

南京市の大校場飛行場に元々所在した部隊は、2015年にすでに撤収した。第10師団のH-6Hは、新たに建設された六合飛行場に移転した。ここは23機のH-6Hが駐屯している。弾薬庫は全て新しく、3個のY-8型電子偵察機用の格納庫がある。第10師団は、相当重視された爆撃機師団であり、現在約1個団が逐次H-6Kに換装を開始したようである。しかしH-6Hも依然として就役している。

以上